

令和8年産(7年播種) 麦類生育概況

長野県農業試験場 作物部

調査月日	項目	大麦:ファイバースノウ			小麦:しろゆたか		
		平年*1	令和7年(播)~8年(産)	平年比	平年*2	令和7年(播)~8年(産)	平年比
出芽揃い期	出芽数 本/㎡	160	182	114%	177	—	
越冬前 (12月15日)	草丈 cm	12.8	13.4	105%	14.2	—	
	茎数 本/㎡	483	555	115%	690	—	
	葉数	4.5	4.6	+0.1	5.1	—	
越冬後 (3月1日)	草丈 cm	14.1	9.8	70%	17.5	—	
	茎数 本/㎡	1099	760	69%	1345	—	
	葉数	7.3	6.6	-0.7	7.5	—	
(3月15日)	草丈 cm	17.2	15.4	89%	19.9	—	
	茎数 本/㎡	1059	887	84%	1295	—	
	葉数	8.3	8.1	-0.2	8.3	—	
幼穂形成期 茎立期		2月22日	3月1日	+7	3月1日	—	
		3月24日	3月27日	+3	3月24日	—	
出穂期		4月26日	4月22日	-4	4月28日	4月26日	-2
成熟期		6月4日	6月1日	-3	6月13日	6月11日	-2
成熟期	稈長 cm	93	107	116%	85	92	109%
	穂長 cm	4.6	4.6	100%	8.5	8.9	105%
	穂数 本/㎡	489	597	122%	623	627	101%
収量	子実重 kg/a	71.3	85.8	120%	68.6	75.1	109%
	容積重 g/l	692	701	101%	802	798	99%
	千粒重 g	37.6	40.7	108%	43.4	43.3	100%

* 1 大麦の平年値は過去7年間における収量最大年と最小年を除いた5カ年の平均値。
* 2 しろゆたかは令和3～令和7年産の5年間の平均値。令和7年産の子実重は収穫方法が異なるため平年値から除外した。

<耕種概要>

栽培様式:条間30cmドリル播
播種期:令和7年10月22日 播種量: 7kg/10a
基施窒素量: 6kg/10a

<生育概況>

出芽揃い期 播種後に大雨となり湿潤状態が続いたが、出芽数は平年並みであった。

越冬前 草丈、茎数、葉数ともにほぼ平年並みである。播種後の気温がほぼ平年並みで推移したためと考えられる。

越冬後 3月1日時点の平年対比では、草丈は短く、茎数は少なく、葉数は遅れている。2月上旬までほぼ平年並みの気温で経過したことで、高温傾向だった近年の生育進度より遅れたと考えられるが、越冬後における茎数としては適正本数である。
3月15日時点の平年対比では、草丈及び茎数で前回調査より平年比が高くなった。

幼穂形成～茎立期 幼穂形成期は平年より7日遅く、茎立期は平年より3日遅いが、幼穂形成期よりは生育速度が速まっている。これは3月中旬に以降高温傾向だったことで生育が進んだためと考えられる。

出穂期 平年より大麦で4日、小麦で2日早まった。3月中旬以降、高温が続いた影響と考えられる。

成熟期 大麦は稈長が平年より長く、穂長が平年並み、穂数が平年より多かった。穂数については、越冬中から越冬後の生育及び分けつ発生が遅れる一方、幼穂形成期及び茎立期が早まったことから、無効分けつが少なく、穂数が確保されたと考えられる。小麦は稈長、穂長が平年より長く、穂数は平年並みであった。冬期が高温傾向で推移し、積雪による根雪期間が殆どみられず生育が前進し、越冬後も高温、少雨により、順調に生育したことから、全体的に平年より良好な結果になったと考えられる。

収量 大麦の子実重は、平年より20%多収となり、穂数が多く、千粒重が大きいことによると考えられた。小麦の子実重は9%多収となり、穂長が長く、着粒数が多いことによると考えられる。気象条件についても、登熟期間は気温が平年並み～高く、降雨は平年並み～少雨傾向により、湿害や倒伏もみられず、登熟が良好に進んだことが多収に寄与したと考えられる。

(別表) 気象経過

長野アメダスデータより

